

の能力が低下した。

11 健康診断にて偶然発見された心臓腫瘍

宮原 広・朝妻 和香・川又 浩行
高野 義昭・高橋 和志・中川 一馬
水落 勇人・斉木久美子・長谷川邦雄
山崎まゆみ

立川メディカルセンター立川総合
病院生理検査室

【はじめに】近年、超音波装置の進歩に伴い心腔内腫瘍の検出率は著しく向上し、その形態の観察や発現機序の解明に極めて重要な役割を果たしている。

今回我々は、健康診断を契機に偶然発見された心臓腫瘍症例を経験したので報告する。

〔症例1〕53歳女性

健康診断にて心電図異常を指摘され、精査目的に当院循環器内科に受診。

心臓超音波検査にて左房内に巨大な腫瘍を認め、腫瘍の切除を目的として胸部外科へ転科。

術後の経過は順調であり、現在外来にて経過観察中。

- ・心電図所見：洞調律（67拍/分）。ST変化を伴う左室肥大疑い。
- ・超音波所見：左房内に心房中隔に茎を有する巨大な粘液腫のような腫瘍塊を認めた。
- ・手術所見：心房中隔に有茎性の発育をした4.5×6.0cmの粘液腫。
- ・病理所見：良性の粘液腫。

〔症例2〕48才女性

会社の健康診断にて心電図異常を指摘され当院循環器内科へ受診。

超音波検査にて心腔内に巨大な腫瘍塊を認め入院。精査施行後に腫瘍摘出術を行う。

術後良好にて現在、外来にて経過観察中。

- ・胸部X線写真：CTR56%，肺うっ血所見なし。
- ・心電図：洞調律（85拍/分）。心房性期外収縮（+）。有意なSTの変化は認めない。
- ・超音波所見：経胸壁法にて右房内に4.5×3.5cmの腫瘍塊疑い。

経食道法にて右房内の心房中隔に付着しているかのような腫瘍塊を認めた。

- ・RI所見：Gaシンチにて心臓周囲の異常集積なし。
- ・イマトロンCT：心房中隔脂肪層と連動するように左房下面にepicardial lipoma susp.
- ・MRI：epicardial lipoma susp, 右房及び下大静脈はmassにより圧排されている。
- ・心臓カテーテル：冠動脈造影は正常。心駆出率54.1%。

下大静脈造影にてcardiac epicardial tumorを認めた。

- ・手術所見：腫瘍塊は長径8cmと巨大で下大静脈周辺から左房を押し上げるように後方に発達しており左房が押しつぶされたようになっていた。
- ・病理所見：良性の脂肪腫。

【考察】原発性の心臓腫瘍はその半数が粘液腫であり、脂肪腫は10%と稀である。組織学的には共に良性の事が多いが、臨床的には血行動態の悪化等の悪性経過をたどるとの報告が多い。

今回経験した症例は共に臨床症状がなく、健康診断時の心電図異常が糸口となり早期発見・早期に根治する事が出来た。

超音波検査法は簡便に施行できる点から二次検診等のスクリーニングに大変有効であり、病変組織の性状もある程度は同定が可能である。しかしながら症例2のように超音波検査で病変部を検索し得たものの解剖的な把握、発生部位の同定には至らず、現状では他の画像検査との併用が重要と思われた。

【まとめ】

- 1) 心エコー検査は、腫瘍の存在、形状、大きさや可動性の観察に有用であった。
- 2) 経胸壁心エコー検査では、解剖学的に診断が困難な部位があり、他の画像診断と心エコー検査を併用することにより、さらに診断精度が上がった。